

アルケイア―記録・情報・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 三九―五五頁

南山アーカイブズ

特集Ⅰ「ヒルシュマイヤープロジェクト完結記念研究会」

ヒルシュマイヤーの教育論の背景 ——ヒルシュマイヤー文庫について

林 雅代

南山大学人文学部心理人間学科

Johannes Hirschmeier's Book Collection as a Clue to His View on Japanese Education

Department of Psychology and Human Relations, Faculty of Humanities,
Nanzan University

HAYASHI Masayo

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.39-55
Nanzan Archives

はじめに

一 ヒルシュマイヤーの教育論の特徴と企業者研究との関係性

二 日本の教育に関する研究動向とヒルシュマイヤーの教育論との関係性

三 ヒルシュマイヤー文庫への着目

おわりに

ヒルシュマイヤーの教育論の背景——ヒルシュマイヤー文庫について

林 雅代

はじめに

南山大学社会倫理研究所・南山アーカイブズ・ヒルシュマイヤー著作集編纂委員会編『南山学園史料集一〇 ヨ
ハネス・ヒルシュマイヤー著作集 教育論』（二〇一五年）所収の解説論文「ヒルシュマイヤーの教育論」におい
て筆者が指摘したように、ヒルシュマイヤーは、一九七二年の南山大学長就任ごろから、教育論をさかんに論じる
ようになった。^{〔1〕}それは、新聞やビジネス誌、PTAや矯正教育の関係者の会報等の記事執筆、一般市民・PTA等
を対象とした講演会、教育番組などのテレビ出演など、多様な形態で展開された。

ヒルシュマイヤーの教育論は、必ずしもアカデミックな領域で展開されたわけではないため、その主張の典拠は
明らかにされていない。ヒルシュマイヤーの教育論は、当時の日本の教育についての研究知見をどの程度ふまえた
ものであったのであろうか。当時の研究知見との関わりの中に、ヒルシュマイヤーの教育論を位置づけることは、
果たして可能なのであろうか。

本稿では、ヒルシュマイヤーの蔵書であるヒルシュマイヤー文庫を基に、こうした課題に迫ってみたい。その作業を通じて、解説論文で挙げたヒルシュマイヤーの教育論の三つの特徴の相互関係や、ヒルシュマイヤーの企業者研究との関係についても、検討することとしたい。

一 ヒルシュマイヤーの教育論の特徴と企業者研究との関係性

筆者は、ヒルシュマイヤーの教育論について、以下の三つの特徴を指摘した。第一の特徴は、それが彼の専門である日本経済論の視点から論じられたということであり、高度成長期に登場した「教育ママ」概念に加えて、これに対応する「企業パパ」概念を唱え、いわゆる日本の経営のもとで、女性―母親中心の学校および家庭教育の世界と、男性―父親中心の企業の世界という二重構造を基盤としていることを主張した。ヒルシュマイヤーの教育論の第二の特徴は、ドイツを主とした比較社会的な視点からのものであったという点である。日本では家庭教育が学校教育に従属しており、子どもが勉強さえてくればよしとしてしまうような風潮があるのに対して、ドイツでは家庭教育が独自性を持っている、とする主張が中心である。そして、第三の特徴は、神父ないしはキリスト者としての立場から論じられたという点であり、良心を形成し、自らを律することができるようになるための良心教育の必要性を説くものであった。

ヒルシュマイヤーの教育論のこれら三つの特徴は、彼の外国人神父であり日本経済研究者であるという背景のもとで、互いに関わり合っている。第一の特徴と第二の特徴に関していえば、企業を中心にみた日本社会における人間形成や人材育成、人材選抜のあり方とその文化的背景への洞察からもたらされたものであったと考えられる。

二〇一四年六月に行われたヒルシュマイヤー著作集刊行記念シンポジウムにおいても、ヒルシュマイヤーの企業者研究では、単に経済的な側面だけでなく、企業者を生み出す社会や文化、宗教的な基盤などにも目が向けられていることが指摘されている。²⁾ こうしたヒルシュマイヤーの企業家研究の特徴は、彼の教育論へと通じる点である。

また、第二の比較社会的視点と良心教育の強調という特徴は相互に重複するものであり、ドイツの家庭教育を基盤にして、日本の学校教育や家庭教育のあり方を批判的に考察するといった形で展開されている。その中で、ヒルシュマイヤーが日本の教育に欠けていると主張していたのが「厳しさ」であり、良心教育の必要性を説く彼の教育論の第三の特徴は、日本の教育への提言という点であった。

ヒルシュマイヤーの教育論は、全体としては日本の教育に対する批判であった。由井常彦は、ヒルシュマイヤーが日本の経営の弱点として、「モーレッツ社員」を生み出し、個々人やその家族が犠牲となる側面や、良い会社に入ることが教育の目的となるために教育に歪みが生じるという認識をもっていたことを指摘している。³⁾ ヒルシュマイヤーにとって、日本の教育の特徴とは、日本の経営の弱点でもあったといえる。

二 日本の教育に関する研究動向とヒルシュマイヤーの教育論との関係性

ヒルシュマイヤーが教育論を展開した一九七〇年代から一九八〇年代の時期は、日本の経済的發展を背景に、国内外で日本論や日本人論がさかんに論じられた時期であった。ここでは、特に彼の教育論に関連する領域について、当時の研究動向を概観し、それがヒルシュマイヤーの教育論とどのような関係性をもっていたのかを検討する。

一九七〇年代から一九八〇年代にかけての日本の教育に関する研究としては、まず学歴研究が挙げられよう。当

時、日本社会を特徴づける言葉としてしばしば用いられたのが、「学歴社会」であった。学歴が人生を左右するという信念によって多くの人々が学歴取得に駆り立てられ受験競争へと参加する一方で、そうした社会風潮を批判する声も高まっていた。⁽⁴⁾さまざまな論者が参加した学歴をめぐるこの論議は、学歴社会論と呼ばれている。濱中淳子⁽⁵⁾が作成したこの時期の関連書籍のリストをみても、教育学領域の研究者だけでなく、経済学など他の分野の研究者、経営者、ジャーナリストなど、多様な領域で論じられていたのが学歴社会論であり、アカデミックなものから一般的なもので、膨大な量の書籍が刊行されていたのであった。⁽³⁾

学歴研究の中では、学歴が実際にどのような効用をもつのかに関する実証的な研究が多くを占めていた。麻生誠・潮木守一編『学歴効用論』（一九七七年）は、その代表的なものである。⁽⁶⁾こうした研究の中には、ビジネスキャリアにおける学歴の効果を検討するものもあり、小池和男・渡辺行郎『学歴社会の虚像』（一九七九年）や萬成博『ビジネス・エリート』（一九六五年）など、経済学の領域や、経営学での企業者・経営者研究とも関連する側面をもっていた。⁽⁷⁾

さらにいえば、学歴社会論は、日本社会論でもあった。学歴主義を日本社会の特徴としてとらえる風潮が妥当かどうかを、諸外国と実証的に比較検討することも、学歴研究の中ではしばしば行われた。中でもロナルド・ドーア『学歴社会―新しい文明病』（一九七八年）は、「学歴の国際比較研究の古典的作品」と評価される、重要なものであった。⁽⁸⁾

ヒルシュマイヤーの教育論の中では、日本の学歴主義や入試制度への批判が多く見られる。⁽⁹⁾その主張は、大衆的に展開した学歴社会論の基盤にあった、学歴取得をもっぱら指向する日本の学校教育や家庭教育のあり方への懐疑と重なるものであった。と同時に、学歴主義自体は諸外国にもみられるものとして、日本の学歴主義の特徴について

て、アカデミックな研究知見を念頭に置きつつ、冷静に論じる場合もあった。⁽¹⁰⁾ ヒルシュマイヤーの学歴社会論には、想定される読者や論じる内容によって、若干異なる形で展開された部分がある。

一九七〇年代から一九八〇年代にかけての日本の教育に関する研究の中で、いまひとつ重要なものとして挙げられるのは、日本人のしつけや人間形成に関わる比較社会的研究である。日米比較を中心としたそのような研究がさかんとなったのは、第二次世界大戦後、ルース・ベネディクトの『菊と刀』（一九四六年、邦訳は一九四八年）を皮切りに、土居健郎『甘えの構造』（一九七一年）や中根千枝『タテ社会の人間関係』（一九七二年）などの名著が生み出されたことを背景としている。こうした流れを受けて、日本人のパーソナリティや人間形成に関する発達心理学的な研究がなされるようになった。⁽¹¹⁾

ヒルシュマイヤーの企業者研究では、企業者だけでなく、それを生み出す社会文化的背景に広く注意が払われている。⁽¹²⁾ 人間形成への関心は、彼の研究関心とも重なるところであった。

ヒルシュマイヤーが、日本人のしつけや人間形成に関する研究動向に目配りしていたことは、例えば一九六八年に行われた対談の中での、次のような言及からも窺うことができる。

イギリスでは、R. P. ドーアとかW. G. ビースレイとかいう人が日本研究の中心になっています。しかし、やはり一番盛んなのはアメリカです。例えばバークレー大学やハーバード大学で高い水準の研究が行なわれています。／先日、バークレー大学のG. デボースから、おもしろい論文を送ってもらいました。デボースは、岡山県のある村での調査結果に基づいて、日本人の動機論を書きましたが、そのなかで次のように言っています。／日本では仕事自体が大切にされる。また、親から子にかけられたエクスペクテーション（期待）が、重要な動機になる。

また、日本人の態度は、しばしばマゾヒストである、とも書いています。つまり、仕事をするとき、苦しくても、いやだといってやめない⁽¹³⁾。

しかしながら、ヒルシュマイヤーの教育論は、学術的な形ではなく、対談や講演のような形で展開されているため、彼が参照した研究がどのように具体的に言及されることはほとんど見られない。ヒルシュマイヤーは、実際にこうした日本の教育に関する研究をどの程度参照して、どのように彼の教育論に反映させていたのであろうか。このことを探る手がかりとして、「ヒルシュマイヤー文庫」に注目してみたい。

三 ヒルシュマイヤー文庫への着目

「ヒルシュマイヤー文庫」とは、ヒルシュマイヤーの蔵書と推測される図書の一群であり、南山大学名古屋図書館内の「三宅文庫」に相当程度集中して所蔵されているものである。

ヒルシュマイヤー文庫が所蔵されている三宅文庫とは、ヒルシュマイヤーと親交のあつた三宅重光氏（当時東海銀行会長）の寄付により、一九八二年一月に創設が決定された。南山大学の国際化プロジェクトの一環として、日本の経済や経営に関する欧文文献を中心とした図書の収集を行うという趣旨であつた⁽¹⁴⁾。しかしながら、この決定から約半年後の一九八三年六月にヒルシュマイヤーが急逝し、同年一〇月の三宅文庫開設時のオープニングセレモニーでは、三宅氏がヒルシュマイヤーの思い出を語つた⁽¹⁵⁾。

その三宅文庫の中の図書を実際に手に取ってみると、「ヒルシュマイヤー文庫」という印の押された図書が含ま

他に手がかりを求めて、当時の図書館への寄贈図書への寄贈図書の目録である「受贈原簿」の一九八三年に関するものを見ると、二月二六日に神言会より大量の寄贈図書があったことが記録されている。これらには、八三一—一〇七四番から八三一—二七九八番まで、寄贈図書のコードが割り振られている（写真2）。実際にヒルシュマイヤー文庫の図書をいくつか手に取ってみると、ヒルシュマイヤー文庫の印に付された寄贈の日付および寄贈図書のシリアルナンバーが一致する。このことから、「受贈原簿」のうち、一九八三年二月二六日に神言会から寄贈された図書のリス

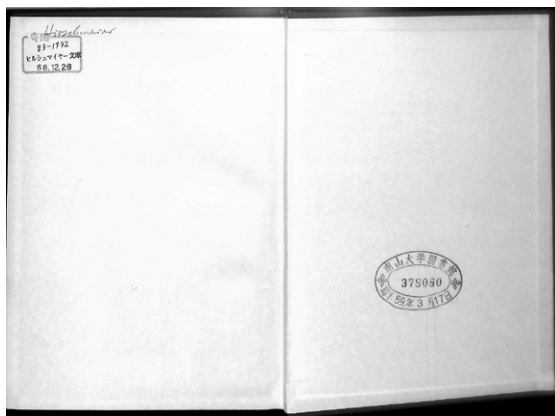


写真1 ヒルシュマイヤー文庫に収められた著書『日本における企業者精神の生成』

れていることに気づく（写真1）。この「ヒルシュマイヤー文庫」の印には、「寄贈」の文字と、手書きで八三一***という四桁の数字、さらに「五八・一二・二六」のスタンプがある。このスタンプの押された図書の中には、ヒルシュマイヤーの自署がなされたものもあるため、「ヒルシュマイヤー文庫」の印のある図書がヒルシュマイヤーの蔵書と推測されるのである。

名古屋図書館には、ヒルシュマイヤー文庫の目録は存在せず、図書館報にもヒルシュマイヤー文庫を取り上げた記事は見当たらない。先述した三宅文庫開設に関する『南山』ブレティンの記事にも、三宅文庫にヒルシュマイヤーの蔵書を所蔵することについての言及はない。ここから、ヒルシュマイヤーの蔵書の三宅文庫への所蔵は、三宅文庫開設時ではなく、蔵書が図書館に寄贈されたのちのことであったと思われるが、詳細は不明である。⁽¹⁶⁾

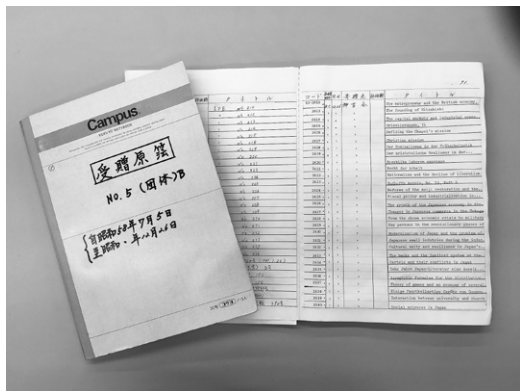


写真2 受贈原簿

のことから、ヒルシュマイヤー文庫は、すべて一括して三宅文庫の一部となったわけではなく、おそらくは日本の経済・経営に関する欧文献を中心に収蔵するという三宅文庫設立の趣旨に照らして、選別がなされたものと思われる。

ヒルシュマイヤー文庫を概観すると、もともと量的に多いのは、やはりヒルシュマイヤーの専門である経済学や経営学のものである。さまざまな企業の社史や、特定の企業に関する文献も多い。経済学や経営学の領域とも重なりを持つ日本論や日本人論・日本社会論に関する文献も、一定の割合を占めている。また、神父として、日本研究

トを、ヒルシュマイヤー文庫のリストと見なすことが可能である。

ただし、同じく「受贈原簿」の一九八三年三月三一日にも、神言会より数冊の図書が寄贈されている。該当の図書を実際に確認してみると、三宅文庫内に所蔵されており、ヒルシュマイヤーのサインもあるが、寄贈印には「ヒルシュマイヤー文庫」の文字はない。このことから、ヒルシュマイヤーの蔵書のすべてにヒルシュマイヤー文庫の印が押されているわけではないこと、およびヒルシュマイヤー文庫印がなくてもヒルシュマイヤーの蔵書として三宅文庫内に所蔵されたものもあることが分かる。ヒルシュマイヤー文庫の印が押されたのは、おそらく、一九八三年一月二六日に寄贈された一七二四冊のみであると推測される。

また、ヒルシュマイヤー文庫の印が押された図書の多くは三宅文庫に所蔵されているものの、図書館の他所に配架されているものもある。こ

者として、ヒルシュマイヤーが宗教文化に関しては深い関心と造詣をもっていたことは、宗教学（比較宗教学を含む）に関する文献の多さにも表れている。図書の書かれた言語としては、英語、ドイツ語、日本語の順に多く、原著が日本語のものの翻訳版もある。

前節で引用した対談の中で、ヒルシュマイヤーが言及した人類学者G. デボースの論文と推測される文献も、ヒルシュマイヤー文庫に所蔵されている。¹⁸ デボースの論文は、他にも二つヒルシュマイヤー文庫にあり、ヒルシュマイヤーがデボースの日本研究から情報を得ていたことは確認できた。しかし、同時に、デボースの文献がこの三つに限られていることから、それほど体系的にレビューしているわけではなさそうだともいえる。

また、同じ先述の対談の中で、イギリスの日本研究者としてヒルシュマイヤーが言及したR. P. ドーアについても、ヒルシュマイヤー文庫にそれほど多くを見出すことはできない。ドーアは、『学歴社会』（一九七八年）や『江戸時代の教育』（一九六五年・一九七〇年）¹⁹ などの教育関係の著作でも知られるが、これらはヒルシュマイヤー文庫には含まれていない。

ヒルシュマイヤーは、教育論の中で、しばしば「甘え」という言葉を用いており、ヒルシュマイヤーの一般向けの講演タイトルにはしばしば「甘え」という言葉を見出せる。²⁰ これはおそらく、当時のベストセラーであった土居健郎『甘えの構造』の議論を意識したものであろう。だが、土居の著作もヒルシュマイヤー文庫に見ることはできないのである。

ヒルシュマイヤー文庫の中に、心理学や教育学の領域で日本の教育や人間形成の領域を扱った文献、つまり図書の分類番号でいえば一四〇番台・三七〇番台に分類されるものは限られており、一七〇〇冊を超えるヒルシュマイヤー文庫に占める割合は非常に小さい（表一）。ヒルシュマイヤー文庫がヒルシュマイヤーの読んだものすべて

表 1 ヒルシュアイヤー文庫に含まれる心理学・教育学領域の文献

NDC	著書名・著者	出版社・出版年	請求番号	資料ID
	Die Lust am schlechten Gewissen / Helmut Schoeck	Herder, 1973	B-5/145/438	377588
	日本人の性格 / 依田新, 築島謙三編	朝倉書店, 1970	B-5/140/373/v2/A	378171
140番台	日本人を考える: 比較心理の立場で / 築島謙三著	大日本図書, 1977	B-5/143/51/A	377710
	Psychology of the Japanese people / translated by Albert R. Ikoma, under the auspices of the East-West Center	University of Tokyo Press, 1971	B-5/143/72/A	377613
	Catholic colleges and the secular mystique / edited by Eugene E. Grollmes	B. Herder, c1970	B-5/377/235	377377
	Entwurf eines bayerischen Hochschulgeseetzes / hrsg. Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und Kultus	1973	B-5/377.1/229	378226
	Familientraining: Werte klaren - Entscheiden lernen 80 Interaktionsspiele / Sidney B. Simon, Sally Wendkos Olds: mit einem Vorwort von Thomas Gordon; aus dem Amerikanischen übers. von Katharina Knohl-Hobereg	J. Pfeiffer, 1978	B-5/376.1/117	377446
	Federal role in education	Congressional Quarterly Service, 1965	B-5/373/211	378571
	学歴社会の虚像 / 小池和男, 渡辺行郎著	東洋経済新報社, 1979	B-5/371.3/218/E	377877
	学習と指導の心理学: 教育心理学の基礎 / 塩田芳久編著	黎明書房, 1979	B-5/371.4/668	378170
	Grundordnung für die katholischen Schulen in freier Trägerschaft in Bayern / verantwortlicher Leiter, Hubert Fischer; hrsg. Ordensschulzentrale	1979?	B-5/374/160	378211
	Hochschule für die Demokratie: Grundlinien einer sinnvollen Hochschuleform / Richard Lowenthal; hrsg. in Verbindung mit dem Bund Freiheit der Wissenschaft	Makrus, c1971	B-5/377.1/230	377360

370番台	講演豊かな国における新しい教育をどうしたらよいか / ヨハネス・ヒルシュマイヤー [著]	大阪府立高等学校長協会企画委員会, 1982	B-5/371.3/242	378007
	学ぶ心 / 柳瀬睦男 著	上智大学入試センター, 1982	B-5/377/233	377784
	ミュンヘンの中学生 : シュタイナー学校の教室から / 子安美知子 著	朝日新聞社, 1980	B-5/376.3/101/A	377907
	なぜ一般教育か / 絹川正吉 編	国際基督教大学教養部, 1980	B-5/373.1/159	378564
	日本人の教育観と職業観 : 生活欲求の実態とアクセジビリティ / 経済企画庁国民生活局国民生活課 編	大蔵省印刷局, 1978	B-5/372.1/362	378172
	Perspektiven einer christlichen Pädagogik : Aufforderung zu einer neuen Initiative / herausgegeben von Franz Pöggeler ; unter Mitarbeit von Walter Hammel ... [et al.]	Herder, c1978	B-5/371.1/166/A	377443
	Problems and prospects of an urban public university : Biennium 1970-1972 / a report by Robert E. Marshak, the City College of the City University of New York	City College, 1973	B-5/377/234	378202
	私学山脈 / 毎日新聞社中部本社報道部 編	毎日新聞社開発株式会社, 1977	B-5/370/127	378126
	私立大学とその財政 / 小寺武四郎 著	日本私立大学連盟, 1979	B-5/377.1/228	378146
	止揚の教育 / 姫路市立白鷺中学校 編 第1集	姫路市立白鷺中学校, 1979	B-5/375.1/199/v.1	378127
	止揚の教育 / 姫路市立白鷺中学校 編 第2集	姫路市立白鷺中学校, 1980	B-5/375.1/199/v.2	377924
	Unsere Kinder vor dem Bildschirm : Ratschläge für die pädagogische Nutzung von Fernsehen, Film und Funk / Karlheinz Pfeiffer	Herder, 1974	B-5/376/108	377455
	Wenn Mutter allein erzieht / Gusti Gebhardt	J. Knecht, 1969	B-5/376.1/116	377378
	ヨーロッパの大学改革 : 坂田文部大臣訪欧記録 / 文部省 [編]	文部省, 1971	B-5/377.2/24/A	377834

注) 南山大学図書館OPACによってヒットした、三宅文庫 (B-5) 内の140番台と370番台の図書のうち、ヒルシュマイヤー文庫と目される370000番台の資料IDを持つ図書をリストした。ただし、中等教育レベルの教科書ないしは副教材と思われる図書は省いた。

でないことは当然とはいえ、彼が実に多く教育論を語っていたことを考えると、このジャンルの文献の少なさは意外なほどである。

その一方で、教育学領域の文献の中には、ドイツの一般向け子育て書と思われるものも複数冊あり、ヒルシュマイヤーがドイツの家庭教育について、単に自身の経験のみに基づいて語っていたのではなく、ドイツの家庭教育の一般的な傾向を子育て書を読むことで把握しようと努めていたことも見て取れるのである。

このように、ヒルシュマイヤー文庫の中に見出せる日本の教育や人間形成に関する文献によって、ヒルシュマイヤーの教育論の背景を解き明かし、その位置づけを行おうという試みには限界がある。とはいえ、ヒルシュマイヤー文庫に含まれる文献の傾向から、ヒルシュマイヤーが自身の教育論をどのように形成したかについて、一定の推測を行うことは可能である。

つまり、ヒルシュマイヤーは、心理学や教育学の文献以上に、日本の経済や経営に関する文献を読む中で、日本の教育や人間形成のあり方についての情報を多く得ていたのではないだろうか。ヒルシュマイヤーが企業者・企業家研究において、細かい部分にこだわらずにことごとく全体性をつかむという大局的・抽象的な見方を示していたように⁽²⁾、教育論においてもまた、関連する研究を網羅的にレビューして論じるというよりも、限られた情報源から全体的な構造を把握し、それをふまえて、日本の教育や人間形成の個別具体的な現象を念頭に置きつつ、論じていたのではないかと考えられる。

おわりに

ヒルシュマイヤーは、日本の経済・経営・企業者研究を通じて、日本的経営の弱みを認識するに至ったが、その弱みとは教育の側面であつた。こうした問題意識が、南山大学学長就任以降、彼の教育論として展開されていった。その主張が、心理学や教育学の領域を超えて、宗教学や文化人類学など、広範な学問領域についての知識や洞察に基礎づけられていたことは、彼の蔵書であるヒルシュマイヤー文庫からも窺うことができる。

なお、本稿では、ヒルシュマイヤー文庫の中心を占める経済学や経営学の文献、あるいは宗教学の文献についてはほとんど触れられなかった。近年、企業者史研究がふたたびさかんになってきている中で、改めてヒルシュマイヤーの業績が見直される際、ヒルシュマイヤー文庫の存在にも注目が払われることを期待したい。

〈謝辞〉

「ヒルシュマイヤー文庫」について、当時の「受贈原簿」の所在確認に際しては、南山大学名古屋図書館の紅露剛氏および加藤富美氏にご尽力いただきました。記して感謝いたします。

註

- (1) 林雅代「ヒルシュマイヤーの教育論」『南山大学社会倫理研究所・南山アーカイブズ・ヒルシュマイヤー著作集編纂委員会編』『南山学園史料集一〇 ヨハネス・ヒルシュマイヤー著作集 教育論』南山アーカイブズ、二〇一五年、一七二—一七九ページ。
- (2) 例えば、宮本又郎は、ヒルシュマイヤーの視点を「ミクロだけではなく、マクロ」として、「・・・マクロというのは、それだけの意味ではなくて、個人の申請とか行動よりも、社会的な価値体系とか、その国のその民族の文化、宗教といったものとの関連で追及しようとしたことです」と述べている。宮本又郎「ヨハネス・ヒルシュマイヤー博士と企業者史学の発展」岡部桂史・奥田太郎編『ヒルシュマイヤー著作集刊行記念シンポジウム二〇一四講演録 工業化と起業家精神』南山学会、二〇一五年、三六ページ。
- (3) 由井常彦「日本の経営発展の将来展望—日本のシステムの連続と変化について」岡部・奥田編、同上、二八ページ。
- (4) 濱中淳子『検証・学歴の効用』勁草書房、二〇一三年、二ページ。
- (5) 同上、一六ページ。
- (6) 麻生誠・潮木守二編『学歴効用論』有斐閣、一九七七年。
- (7) 小池和男・渡辺行郎『学歴社会の虚像』東京経済新報社、一九七九年、萬成博『ビジネス・エリート』中公新書、一九六五年。
- (8) Dore, Ronald P. 1976. *The Diploma Disease: Education, Qualification, and Development*. (松居弘道訳『学歴社会 新しい文明病』岩波書店、一九七八年)。「学歴の国際比較研究の古典的作品」という評価は、吉川徹・中村高康『学歴・競争・人生』日本図書センター、二〇一二年、二二六ページ。
- (9) 例えば、「試験社会」『中日新聞』「紙つぶて」一九七四年三月四日夕刊(南山大学社会倫理研究所・南山アーカイブズ・ヒルシュマイヤー著作集編纂委員会編、前掲、一四六一—四七ページに所収)。
- (10) 「頭のある国は貧乏しない—ドイツと日本の繁栄—」『経営者会報』(この人と六〇分) 二七〇号、第二二巻第五号、一九七九年五月、日本実業出版社、三一—三五ページ(南山大学社会倫理研究所・南山アーカイブズ・ヒルシュマイヤー著作集編纂委員会編、前掲、一一—一六ページに所収)。
- (11) 東洋『日本人のしつけと教育』東京大学出版会、一九九四年、一二ページ。
- (12) 宮本、前掲、四八ページ。
- (13) 「外国人は日本人の経済をいかに見るか」『週刊東洋経済』一九六八年八月二四日号(通巻三四二六号)(引用箇所は、

ヨハネス・ヒルシュマイヤー著・川崎勝・林順子・岡部桂史編『工業化と企業家精神』日本経済評論社、二〇一四年、三九一ページ。

(14) 「『三宅文庫』を創設 日本の経済経営欧文文献の収集」『南山』ブリテン、第六三号、昭和五八年三月一九日、六ページ。

(15) 「『三宅文庫、図書館でオープンング』『南山』ブリテン、第六七号、昭和五八年一月二五年、三ページ。

(16) これに関しては、寄贈されたヒルシュマイヤーの蔵書を独立した文庫として別置することが困難であったため、「ヒルシュマイヤー文庫」の印を押す形となったようである。南山大学名古屋図書館の関川治代氏の談による（二〇一六年一月八日）。

(17) 「受贈原簿 No.5 (団体) B 自昭和五八年七月五日至昭和五八年一月二六日」および「受贈原簿 No.6 (団体) B 自昭和五八年一月二六日至昭和五八年三月三十一日」南山大学名古屋図書館所蔵。

(18) De Vos, G., 1986. Achievement and Innovation in Culture and Personality. *The Study of Personality: An Interdisciplinary Appraisal* ed. by Edward Norbeck, Douglas Price-Williams, and William M. McCord. Center for Japanese and Korean Studies, Institute of International Studies, University of California.

(19) Dore, Ronald P. 1965. *Education in Tokugawa Era*. University of California Press. (松居弘道訳『江戸時代の教育』岩波書店、

一九七〇年）。

(20) 「ヨハネス・ヒルシュマイヤー教授略歴・業績」『アカデミア 経済経営学編』第八三号、南山大学経済学会・経営学会、一九八四年、五四五―五六七ページには、「子供の育ちにおける甘えの功罪」(中部地区幼児教育研究大会、一九七九年一月二五日、愛知県文化講座)や、「甘えの文化と人間の尊厳」(朝日文化講演会、一九七九年二月三日、大阪朝日カルチャーセンター)などの講演タイトルが見られる。

(21) 二〇一四年六月に行われたヒルシュマイヤー著作集刊行記念シンポジウムにおける、橘川武郎の「確かに実証という点では問題があるのかもしれませんが。ただ、その部分を、先ほどの分業化でいくと、由井先生が補って、その由井先生の実証的な地検に基づいて、ヒルシュマイヤーさんも断絶説から連続説に変えていくという、先ほどの宮本さんのお話にもありました。そのあたりの柔軟さ、そして、そこから導き出す抽象的なものの見方に生命力があるということが優れていたのではないかと思います」(六一ページ)という発言や、石井里枝氏の「ヒルシュマイヤーの議論からは、細部にこだわりのつつも、広い視野から見たときに何を言いたいのかをはっきりさせることが重要であるということを学んだと思います」(七一ページ)という発言に示される。引用は、岡部・奥田編、前掲による。

(22) 宮本、前掲、四六一―四七ページ。